

非
諧
角

5
1928
1



~ 5
1928
1-21

1928
1

Handwritten Japanese text in vertical columns, including a title '御書' (Misho) and several red seals.

Two red square seals with illegible characters.

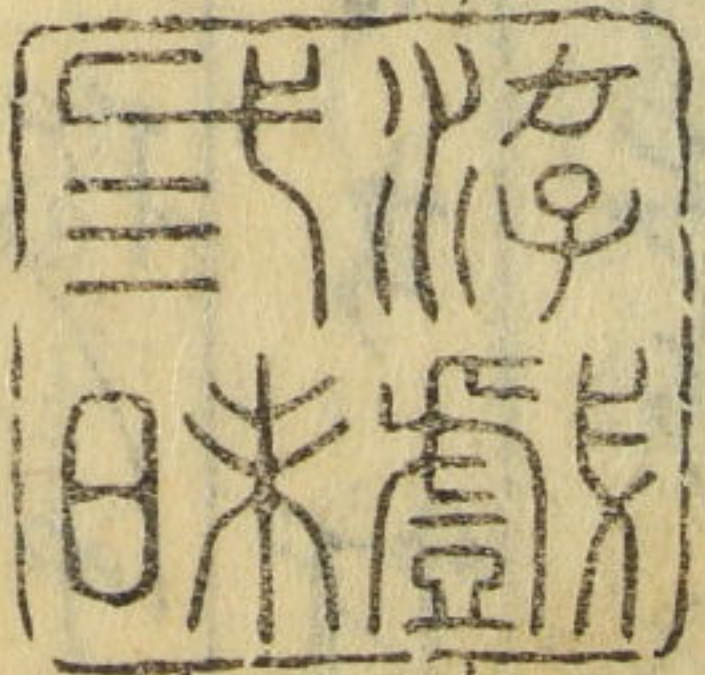
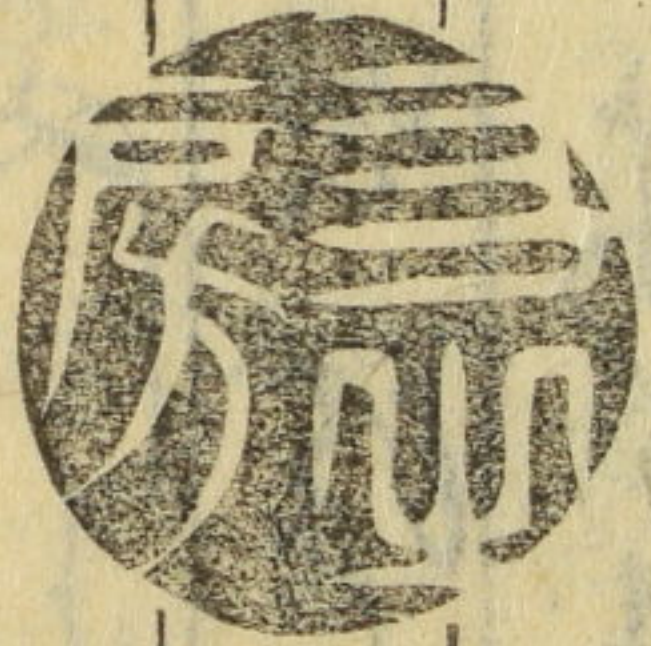
お乃くみまわくく
 意の重し判者於林賞の
 頃人菱正頭よしりえや
 人の目しりえや
 おく家直の好意の
 くらく今下高得の自
 集の傍中かみ
 流奈於蘊奥の探入事
 堂か
 くらく
 手あ
 る
 結ひ
 こ
 鱈
 女
 字
 子
 を
 女
 子
 へ

こた末文よ

明和五子初妹

東叡山下人

露竹舎豐成徳



凡例

明治四十三年十二月廿二日
山田市郎

一 此集々都下宗匠の心と叶はる
句と撰むる真なる物とわつた
るくその勢を

一 凡そ詩の句を神田沙州芝
山の心と承くよる句は佳
句の心と承くよる句は佳
句の心と承くよる句は佳
句の心と承くよる句は佳
句の心と承くよる句は佳

山田市郎

子鷹也と沾山類ふふそ遠一列也
 一 存義の里支天述一列也そそ
 存義類ふふ
 一 獨立は各又上より始む

染跡園 雪成 撰

笑々齋 笠栗 増

猿壽庵 如我 刪定

叢桂樓 雪堂 校

釣月堂

浅州馬道 前二澳門 百観名楼門

須田一渙 長隠改

蕉の菊よ花の着の面くし
 水も咲あ圃の灯と田条の灯
 冬もまるとふふ新てかまのま
 柳の秋の終まきささ
 花やしとあおわくひ女節茶
 鬼のあへけとるもふくまの薬
 尼ふくと木の明る 蓮
 ぬ物のやうが 梅月の影
 蓮枝とて池の雲絡のふら書
 主従もゆえの松の一夜飯



蕉の菊よ
 水も咲あ圃
 冬もまると
 柳の秋の終
 花やしとあ
 鬼のあへけ
 尼ふくと木
 ぬ物のやう
 蓮枝とて池
 主従もゆえ

七百

謝詩解

相應庵

湯島 市徒町角

一漁門

杉浦晋阿 泰川政

春の白
買ふまじ
酒氏花名
琴 源家
秋の白 三井家
ふとの白
景美の白
蓮 橋もと
うわし

昔彼の社多古松 麻一
色内の花の下々 暮秋の憂
吊り竹もろくありしは
縁供者も何じくおはさるる
りて活しあまらさず 鬼灯
傘と袖と清水の通板
さくく 圓果作幣よ 石女
花さくおさるる 冥冥
手の重くわらうは 蓮の香
着いま帰りの舞と 心は

花實庵

上野山下 一澳門
戻爪坂向町

山田長隠 曲秀政

強きりし
穢しきま
秀実のま
一
市のまを
あつし
のりま
ま
ま
ま
ま
のらわたり

玄冥くうた 智匠から 花實那
放しきる 子系 子とま ぬら
左官の 同つ 壁より 身か
果実の まるく 麻尾
研屋の 客の あり 切え
午社系の 遠る 禪多 町
ねん 回し 坊と 通る 舟舟
枕咲いて 市なる 久の 耳の 法泉寺
送井と 糸の 綿 糸の 袖
壺の 底の 天の 川

非

書

二

東巴庵

一神初... 水車... 江戸... の...
一神初... 水車... 江戸... の...
一神初... 水車... 江戸... の...

神田

堅大工町

北治涼門

北 沾涼

火... 白... 手... 車... 簀... 赤... 馬... 梅... 神奈川
火... 白... 手... 車... 簀... 赤... 馬... 梅... 神奈川
火... 白... 手... 車... 簀... 赤... 馬... 梅... 神奈川

味庵

強弱... 君... 白... 仕...
強弱... 君... 白... 仕...
強弱... 君... 白... 仕...

當時旅行

大森門

増田眠牛

松... 為... 大... 位... 相... 我... タ... 持... 気... 於...
松... 為... 大... 位... 相... 我... タ... 持... 気... 於...
松... 為... 大... 位... 相... 我... タ... 持... 気... 於...

非音書

万歳洞

強弱交じ
 一強強まじ
 大が藍暗天淵
 神祇恩恵る
 女うの字女
 かと智角白守
 すくくと拍子
 横巻く化し
 日光松窓
 奥の衣かじ
 するりりし

筋遠橋中門印右 未示門
 斤例所懸灯屋の〜

小菅室馬

指切つてあつことあが男の子
 居あつるとあしふたあつるあの子
 激つあてお女のおどろきあつたり
 目お晴しよあ復の坂
 川つつ 蝶の翔る怖しき
 去来瓜曆名てうら子よゆりし
 大伽藍正弄うらうの三守うら
 言新着のまもほしむら
 恋したくまを〜 松窓
 何去ハ早苗と節のり持

一陽井

一神の字
 意味わら
 何の〜
 世作ら〜
 医者か〜
 ちんちんわら
 柳柳園巻の
 白紙のわが
 ね〜
 蒼松泉の
 り持りあ

田所町 蒼松門
 西側表

谷素外

女の着ま〜む草草
 芽染の帳〜人形〜書
 寺の井れうらあ〜気味〜
 吾娘屋の雪隠〜ま〜
 一人〜あよあ七〜田舎あり
 醫者の端〜る〜
 昭三の穴〜ら〜
 今日もえうける長髪〜醫者
 甚菊の〜あ〜
 谷中の寺よ〜雛子わら寺

萬古庵

とてけりく
あつひひく
ふとふまは
付と方一
便うとく
別下と
あつと
ふと
ふと

坂本二丁目

百洲門

小川尹督

お思ひのく
敷つる
池う
為
膝
九十九
名馬の
鶉の

正月庵

ら方の
か
ひゆ
因
高
自
地
所
称
と

湯
料
野
本
来
雨

野木本来雨

ら
食
茶
瓜
箱
た
の
お
大
民

三寸庵

少しおとけ
もりり
景色九区
法華のり
多徳し
秋夜のり
ふりり
植物九区
意しり
も物り

おのり
内門系
萬英門

波多野萬英

旅路は諸國の多れ
大法華
寺のり
馬上由
おし
おし
都の別
夜つ
医論
比

時尔庵

弱きり
ひりり
植物り
梅り
意り
得り
人り

浅草新巻

西村文郷

未娘のり
娘り
酸り
んり
梅り
心り
近り
多り
喰り
一日は

手枕庵

来雨同町

乾什門

三上寸松

一押れとけを
 巾とてし
 何のしりもあき
 白紙とて考へ
 三上寸松矣
 ありとく
 下とく
 すく
 中より福至
 わる白らし

大さゆきのの
 糸の折りも
 長風多し
 考ぬ糸
 尼の純走
 昔日
 うつろ
 生後
 龍
 ろりけ

社日庵

来示同庵

来示門

野木本季大

強弱
 是も
 布板
 はん
 はん
 はん

一度は
 振袖
 布板
 為
 か
 舟
 ち
 さ
 膚

東西庵

浅州筑前北の素外門花縣の善後山不道加
日音院借地 **岸田色梁**

一許わく

所を女と

すく

わく

わく

わく

綿の縫人の子と信國が夜日
うらなても草の香は汗をく
物子へ出て不二の果肉
青巻きくくくとかく
大工のソリをくくく
ゆくくくくくくくく
清僧のくくくくくく
蟹賣の枝おもひ目よけ
出たり記名くくくく
おろろろろろろろ

新花林

修弱氣たる
忠の白もわたり
忠と多字と入
ひすくくくく
遠言捨持抄
杯と勺中(出
此杯の心守
武我君杯を
武士めりて
博識杯と
なすもわたり

駿河町

貞佐門

城後山音音店裏

皐月平砂

承君も御手寄くくく
通る度先祖と注ぐ 古戰場
於杖持と下する宿の美
妾と妾の癖多し
湯すくくくくく
下給も知くくく
思ひ寄りて忠を後小書
武士の子の名度十六の
ぬれぬの恨抱くく
遠く水の景くくく

風窓

強弱交は
買交秋の
夕夕夕夕
馬橋方寺
晴天楮尾
祢宜 留士
秋夕夕夕
夕夕夕夕
夕夕夕夕
夕夕夕夕

堤所

巽寮湖十門

かみ形九四門の表

深川湖十

菰乃ととり中とよと引て
蓮の芽出しおよと流るる
鳥鴨子とぬくと天意極く禱
大門よと食一輝表の良
幸よ子の老よと匠の花うふ
液美く又見らるるの晴乞
新下へある女さよとう楮
馬醫者の業とさうむ白の表
橋名よとるて流るるハ鳥て出る
駒形よと情もよある 楮方

一石房

先り地ま
附とくく
の海りさ
一折をけ
白しめ
わしと
夕夕夕
恵の夕
夕夕

三十間堀

巽寮湖十門

三十四目横町

洪珠來

目より利く吉飲つ供の丸額
名とく修とと尾のり水
角力中く一程と柳うは
首と首小陳の酒盛
采穂と老くは箱とあぞとく
石の上の法く楯がよるし
用ゆるるる連なるハそよまふ
笈とわらわは元の老あまの
のさ流男老よと新まふ
水流と喰傾城の透つ通る

天目庵

又岸島漆指 兼仲門
通り 荻原庵の表

明田秀億

初よりし
夕中よ
夕のしむる
悪のゆ
名ふかと
とくし

思ひしや何れかて之よきよと
有り谷のや馬士の中り昔昔
過台も坊まよきよとふふ
夢々喰ふ虫入の暗夜は
連と宿りて吹矢吹
傳りしも清見山依の残
時態の酒れ射と切る寺
室々々々の音よ又産
伊加保の湯女の供子松明
は冬は如松家愈て事なる節頭

越入道

木挽町六町目

湖十門

津下吉門

強きともお
おとけきる
白もろく
能逸のふ
わり
あつと
夕きよ

七海のぞおもて高よ中り
継りくくし夜不絶さ
伴くく女の中よ大阿
小兵あはとも神て春
寺のくく里へ馬のくく
江戸の父ある同くく
深き押つて奥家者
由縁は人の為れ極
くくくくも世も完と
同くくくくくく

巢居

室河を可目 盤谷門
東側紀行國公長次郎妻

武内栖鶴

移りゆく
竹まき
別荘
やまの木
意の白糸
とて

竹庭取中りく知りく精進日
大工先一気と晴す亭
刺らゆくまの黒髪
杉原と滑つて燃す緋の衣
崖ゆる梢の上へ水遣ひ
撞撞の尋すまゝなる入
女座ハハの顔持て居る
紫染掛を針ましの鳥舎の
富古も音も耳地の六月
別荘てまよふ 道の名く

三爪庵

高砂町

湖十門

内田柗尾

わくまを
入る終
梅物うら
下さく
そん考し
そん書の
勢ひ

加茂の聖枝く蛙と多葉紛入
細不意出つて二一 天化
花さくそん柗の一案より
紫陽花とそん波をひらけ
梅まきり家もわくした 因雨
室引のゆけしおび 膝元
備りそん自いとるそん
一人云二人云片く松よ海連
吉原者とあまのりてある

寓言辨

弱きものし
字多あり白
あまあり
一紙のむか
そむて信
を
白中よ
意味
わく

高門日庵

高門

大江蜀狗

被薫るるる中ち
尼の牙かうるるの勝歌
枯跡の末のり陰よりかく
憎まらるる
終の然るるも道をも
小く鳴るる
不尊の雲と泳
着るる揺は
鬼の元
浄耳は千

郭窓

和し
秋の白意の
白合敷杯
意
伝
尼の
ら
か
也

統所を丁目たり。湖十門
新道

郭春堂

親のりるる
湯のうらるる
小束るる
病るる
蔓物の
取らるる
利屈るる
仮居るる
近宮の
六丁六夜

軸窓

湖十同庵

湖十門

深川木者

強きものし
おとけり
湖十同の
若きもの
くくく
たぐい

近道不印後後々る 鯨魚
弟の居居あましく之を
物中の首す伸以育鶴
通つおかそ玄の女主従
衣紋あしそおの子子抱
魂祭玉の臺此戸一枚
あ田と出して置て 泣祈
入札の安ひ大ふの神崇り
薩の宿の武士の威へ
家まきとあふ御講の貸素抱

箴力庵

瀬戸物町環屋去手初門
たまらるのく

桑園負喬

強弱交じ
玉津宮
祚松老る
横木
毛所矣
の所わり

あま寒く樹木の空を
盗へみす所 ねを孔明
伏水のうろたもやうは
相嘗ふ醫者の身か滅
生進りるくく初沙の毎
見夕波の傳あハ赤ぬ
あまの船ひわりて睦ま
岸と老る指の定ま
其存ハ迷ひるもあし
神国は蓮池わりのか

言評集

宋寛

強きもし
神祇慈の
まれ強る
あとのるを
ま〜かり
湖千兵の
そ〜時も
わ〜い

湖十同庵

湖十門

角田為裘

方敷うらうを娘の男坂
女の自始うる目して
蚤初年神よりハ氣うそり
陳種とつて所〜は所くを拍子
園野表へ伸を足も木の端
内ふりと百程うはは園より
芝へ枕の下りた 六月
湯女の恨も一母うた
女中りて 厨か〜う
張間の唄よ 捲る底倉

夜雪庵

強弱あ
る〜
も角
云〜け
う〜形
丁

通
露月町

東 金羅

先師貞屋後接川門

廻ふの足よま〜をそ〜
巴山吹 中も ぐ〜
あ〜の役者 初小〜
お〜の座も 新と春日山
市持仏小 小表の景ハ〜
姉如席よ 魚も 丁目
あ〜の梅のわ〜
掃海の隣は 琴の紐を浦
松茶の踊りも ところ〜
お〜の ぶは 初社を

俳諧集

七

規矩庵

人形町通 柳尾門
田平町西側裏

色樂涉十

強弱を
船帯を
あつて
る
恩を
船帯の
うらみ
うらみ

紙船の角力する男の子
下通り(実況) 船帯を
いそぐ(茶屋) 船帯を
仲人(船) 船帯を
実情(船) 船帯を
十人(船) 船帯を
清く(船) 船帯を
島根(船) 船帯を
撞初(船) 船帯を
命(船) 船帯を

雲母物

わくわく
あつて
高情
あつて
系
買
あつて

舟所(高目) 湖十門
茶屋(高目)

千歳團月

小舟と海を
浦静と
杉葉の
遠ぬ
船と
茶屋の
船の
下細
橋方

徳山齋

修飾交し

わうしと青

大ききくを

修と一

羊仲の

意味

あや

あや

八四城

改定大補文の向

羊仲門文角坐随所

榎本牛吞

一雨産す大佛の飯

竹可くせぢあかしくの飯し飯

揚ろりあめさく磨と押はさ

地獄の画角の如き家の大金

中よりあまき茶の湯あぬ通る

祓らりし膝河の涙のちとさき

国の内寺小具の飯あてさく

音深くまゝの角や仲のち

落つての由す馬士の大赤

森子の跡 朝日ひやく

旭連舎

一許をさる

りゆあや

字あや

大名 撰集

買色 古房

中えや

玉菊 菊し

吉原能登の

初りも懐かし

あやあや

あやあや

日本橋

先師存義 文角栖隠

東條萬立

精しくいふ兼て雪の古房也

撰集既満千村を古今の枕し

大名も雪の善福まきまをたてふ

角を掲出す 流流の場

大名まゝさ 玉菊り客

人しをわく 祓作家の思ひは

櫻して房あも柳とわくをさ

髪は利つても 幕のあやさ

燈籠ああまお菊りあや夜し

中宿の籠も袴もあやさ

非言

合歡堂

強弱を以て

実情と

うすま

おすま

恋の白

系文

秋者の白

うすま

龍心亭

買文の白

多免水車

松の尾神

神祇の白

思を

初

はま

西の窪 玉桂沾山
神谷町

内田沾山

千鳥や連を有のそまひと
肩ありの海り松久の系取取
澄の中より白くはる 松屋
母の長陽よ羨度う立
お拍子かきくは松を名と拍
うまうまふふくのもまう松揮
奢りくくく系図をて実ふ
新地へ古の神道者越ス
異是のたむ老沖能相見
歌あふ入る 備士へ 居候

西國柙橋 玉桂沾山
治耕多隣木天の因
和 田 海 旭

清のふく風の後ふふて日
蝶燈の白ふきくするそ家
水も高し居る松の引り
枕把系と拍る 松の尾神
長刀の吹の 遊して 以明
多免をふてそまひつる 魚
松あふるそまひは種も松なり
脚あふる白くはる神の鳥
金貝の白くはる初の花をぬり
遠の子の歳をそまひする

一万堂

わくわくし
一歩の歩
わくわくし
まの白
まの白
まの白

小日向中橋 玉桂治山門
川北横小路

竹内環山

咲く花とまぶ中のふ初ま
都くはくしと綴る臨月
長柄のあけられしは
功を花さけあけ
如席の思を言は書
初橋青男と見え
寐かしくもくの花と
寐り只と一寸の
光のあけくさる
松の道つらて

無徳庵

初くく
休ま
思の
垂の
あ
見
あ
あ

芝赤羽 玉桂治山門
新門前行町

高橋岱山

かくくく子と名
菖弱もやうく
初めくと見え
思のあけは
己のほ
女の身
寺古く
五百
送る

是花坊

赤坂表傳馬町 沾山門
一丁目醬油屋裏

堤風道守

強きなり
買色
名所
おきくゆい
下のり
ふかまじ

ぬのうらみし、ききき の 梳
小形して歩り、松の氣うら
邪へを伝ふ出る、岡六月
風流して、物く、松を放し、
郭へ炬燵やうく、八、松、水、
か、松、松、松、松、松、
而、深、く、松、水、松、
水、火、の中、う、松、水、松、
松、松、松、松、松、松、
松、松、松、松、松、松、

丘花坊

麻布市共衛町 沾山門
中ノ辻番向通り

園林石鯨

一、油、路、三
軍中、の、る
さ、う、ま、い
秋、の、り、も
伝、ふ、や、う
ま、い、し
り、と、え、な
る

市、袋、の、松、人、人、の、松、れ、さ、う、り
ま、松、あ、さ、う、く、松、の、ま、松、
醫、病、の、松、さ、白、松、水、刀
表、の、り、や、松、さ、も、松、の、ま
さ、う、く、松、さ、う、松、の、酒、ハ、女、し
大、徳、の、画、と、紅、圍、の、顔
市、代、の、松、さ、松、武、者、の、松、
松、先、の、松、の、松、る、九、重
松、尼、の、松、さ、松、と、入、て、松、
松、松、の、松、と、松、る、松、の、松、

柗下庵

一柗下庵
思電の
秋や常
の月柗
神の柗
の
伝之

柗町蛤店

活山門

省不言

柗下庵
思電の
秋や常
の月柗
神の柗
の
伝之

柗下庵

一柗下庵
思電の
秋や常
の月柗
神の柗
の
伝之

浅州三節町 海旭門
さうこく店の白

垣紫鳳

柗下庵
思電の
秋や常
の月柗
神の柗
の
伝之

非

言

六井坊

強弱交互
れしこと
入て強ふ
表の目匠
一乃三乃折
そくそく
すくすく
とと
とと

麻布十番
竹町箱荷前

村松子雁鳥

只か〜は花より鹿と花川
地蔵と天窓の赤い姉妹
年々舟も七里の宝舟
写し〜魚の掛り元日
丸綿あり〜鳥の目〜
終とま〜い〜出る 日記
吾等の先〜〜して
智恵と苦しみ〜
ま〜り〜り〜り〜
机離れし 九重〜

古來庵

一神をけり
言傳ふ伝ふ
一〜昔牌
博愛打
すつむ杯と
りりりりり
りりりりり
ま〜

銀座町三丁目喜通
春菜門
鎗屋町新道

馬場存義

衆身と〜〜母のめけり
浪浪大〜の記念〜
此不〜家〜福〜
出家の〜名〜
宵解打すつむ杯の〜
〜幸子許〜
石牌と割る世〜の〜
家並〜河〜と戸名物〜
き池〜と鬼の〜
取揚波〜も波の湯〜

獨庵

弱きをり
竹のりもく
すくくもは
買色秋栲也
床の戸秋る
とつて
え白 玄白杯
考つて
とつて

場町通り和泉町起波門
げんを店

交 買明

長閑さの竹もくもさう瑤の春
晴雨も勿神くもふ つつま
我々のてあおてあふ 五十二
えりくもものすり物 裾えりり
大門も溜りも成ると床の戸
江戸も物乃つて溜りも出を
甲斐と駿河のちねが山りり
夜はく庭を持ぬ 正月
白代り燭をぬるも年々る
江州の勇き 白雨とも津

木樨庵

鯉朝花
鳥のり子照月
鼻の華 鼻のえ
のり
相大倉 徳美長の
名えり
一清 あめりさ
あし
夕ぞちへ
志のりり
ちりり
考へ

神田柳井 瑤琳門
玉泉寺

谷口樓川

陽うつさあうし鳥さかきり
あし原懐れりも 珠珠の歌
先法のむねは 琵琶のあ切く
郭も海へかわりり 松原
新燈も枝燈の多ぬり三りり
育病も水もくも 澄 ちりり
高の塔りり 淋しいりり 書
昨梅も原長と送る雪燈 霧
内もくふ鼻の華もくも 烟村の橋
志著り原の志ととりけて 若

伽羅庵

中町四町目
新道北側

起波門

小栗百萬

跡さうあし
あまのつと
つとれりま
ままひい
わさるをい
らあかあ
はささ

男ふくさはあくつと替日女
平人も本岡もやうり倦
さしと血子面白さ其らうと
年忘らふく一年と忘らうと
首つ引帯ハ引切 願のすけ
松前のお浦の松根もやうり板
浜坊の目おも凝とれりく並
買てくもりし病自れ遠ふれ梅子
夏さうまかか並身と書分りて
宮祿の下ふれり其は坊多持

柳子眠

せうたのり
あまのつと
あまのつと
肩の雲
憂い
とむま
秋の月
淋し
夕暮

榎川因房

榎川門

谷口雞口

誰か為の上れ 運や部
苦の花咲 石のかさ
葉もあも 秋の夕の
藏ハ又ハ目さき
凡の橋や路と 同
教るを 店の櫓の葉
卯のむれ 春を
たうさうさう 油
君さうさう 油
わささのささく 油

深月庵

強弱交じ
秋の夕日都
新於窓杯
一しりぬ
新しゆ
抄物ふら
恩もほ
とく

茅協町 前祇丞門
坂町抄母湯

三上祇丞

色あまうらら官の市味方
長くある徳よと筆うけ家母
一日は木の湯あぐぬ三井の手
如も付てた辻の月
新於るらうらきよぬ細
凱陣お居も一さうかて
席庭うら湯士の火傷と云え
母屋の菊玉き地寒く吹る
筆あまきまうらぬ
一、如よ坂の嶽つてさくら

新樹庵

新しゆら
とく
の月あ
りあ
わら
のさ
りく
る

銀坐町 在義門
二町目西側

花隈圖大

茂夜存えんの稲田九印さ
矢掬うら加茂の紫とま
未のまへさす後やと四と
即下を補小室くの雛
病中の女利と我うさ
筆ハ如年ぬはぬと親の
相撲有り名と説く子の
即格氣の夜あんと
降雪もさまうら
子とさうら

言部

樂成庵

わくわく橋
かひ杉子店

買明門

藤中温克

初〜〜
買の奥の
ん持たり
秋敷の月
或と極物
景も色も
〜〜

景飯もお喰い少時ハ男兒一
着水と和布刈の裾の濡次手
そは降くかハ祇園も外のも
蓮山や吹し 重慶の魂
そは高家の追々〜〜其書し
晴雨の枕十と出〜切
切時も説く都のりやう〜
〜〜く惚れしてを付て〜
寮へ泊って粥の宵子入
初平の〜〜りともる後河彦

先師茶瓶門遠高門

北 在 轉

神田多町二町目東側

強弱交じ
荷の白くま
の尻をこし
泥船楳
芝草のりあ
多物有るく
考る〜
波阜草川
石和川也
粉の名不し

乱松よきの菊のり石和川
産る目と待て松舟此は〜
常盤うまの赤金〜
松明の思ふ芝草の〜
肉とあふ魚女房の柿〜
際あ〜泥船持て〜
あまやの火後の留は草の枝
牙痛あまて脱捨夜火の〜
かつ〜大井川 越
向ふ機浦とるの お袋

俳諧

自在庵

強弱交じり
能のり出目
湯泉場の雨
暮歌孔雀
の聲 買色
結のり所
女房すつく
湖十兵衛の指
松平村松平寺林
下のりどえー
法のりかえー

神田庵

強弱交じり
古くの家
家人の名林
又なえまじ
論評をせ
むすおし
高のり手物
降しく
わが

橋所

白峯門
先所茶瓶後吉門

仲 祇徳

不意おとと遣子の息と画と出
あも橋の藤り 吉武
高尾の息と使る 面打
市見青中と指女も若ら申
清のりつものからまの度毒味と
傾城つを買ふ物と思ふ
茶梅のぬれぬれ 羽のり
君穿つと留まぬ馬と南そ
了のりの中折店も雲のり上
拂子動りて大伽藍さうの

神田新石町 白峯門
東新道西側

木村小知

修持のゆきの源一
清のりつものからまの度毒味と
江湖歌人の意地ふ本お
道好も折のりもぬれぬれ 袖
思ふと若らしてやう若ら紫
茶のりを指してまなく
向のり程のなほ若らて赤
横利のり及夷のりには杖のり
若ら陰まうさうの稽子のり
宮のりや向ひのり家の中のり

雨夜庵

和らうとあはれの
 花をよみしを
 一し傍をみよ
 女房妻内儀
 千ヤットフワト
 ソワト杯を
 酒をうけ
 巨のうよ
 江戸各本を在
 のふの
 うた

南八町堀 存義門
 五町目箱舟橋の西

山本亀成

燃あひ物と禁あふ火つ沼て
 う一切の業と見と御寺系
 似てたう多申へおと一寸と侍
 印も扱を妻の身へ遠ふ地牛
 濃戸物廊よ 巨の近付
 田町の湯屋へ田へ薪 と積
 寺の井れうあ多味
 程ヶ谷ハ遅一子一の海り
 曲池ハ一 廣徳寺前

眉齋

わくし
 麻酔菊
 軍の月
 保氏はく
 勿落物
 尼の月
 徳羅物
 徳ラ羅
 法所

樓川田居

樓川門

田女

采うしくあも海屋の山木
 身もかきかきへ屋を
 夕鳥や六条の如く
 鬼もさる里馬
 いもりり行は空博の
 貝澤も田戸の
 秋もや世と松松
 傾博の侍と抱く子よ

連葉庵

秋の白
江戸の地名
子亮
心持少左
まのり

神代 先師軒門後存我門
藤原下四目橋所者店通

志村常仙

兼宿の一人... 威徳寺
うつと 霍見と知つた名道
後ろきく 他阿道
小野のきく 安野の指
十月のきく 十なり ありこれ
三井のきく 今と云ふ 家母
母着く 衣の厨へ 子と連て
番の辰子と傳へて 母の尼
下野へ 田植へ 通る 金杉
千二の亮 出り たり 也 智恵

丙辰支

心を寝て
移形松臣
松物も
心つこ
う懐か
戸を

小知回る 小知門

木村金洞

眼より せり 祿隣
町くれ 一も 言はぬ 魂糸
十周子 ありあも 齒おも 言ぬ
源の母より かりぬまの 草の香
飯りの 言はぬ 喰子引 見ぬ
所其か くる 年と 説く 四回
水より 出て 西より 書あり 杜る
茶鬼の 宿小 除夜 け 終
実や 表渡 縁小 喰暗 のころ
糸切り 了 宿と 松の 洞へ 入り

宗梅居

新くも
古人の衣引板
大将帯の
秋盤の白
宗梅の衣
杯の白
すのめえん
帯 買色の
白を
何一

宗梅代北

存義門

望家逸志

昔くも着母の白も 長後
類枚して引板の白と裁り
乾鞆の片身は
宗梅の衣
後葉の上は 大将の養
世をかり物の掃ふ 帯の
燭臺の側てわぶおたの袖
踊の形は夜りぬて 遊ふ
所道暑れた 陸岡の旅
遙く此叙をわらるるあぢ

我王子

強弱あは
白と大きく
何一 新衣
の白
子
白
水辺の白
あぢ

两国本沃町 先師乳針後存義門
三町目新波橋町

北村葵足

白粉もまは板の
細代書己の
帆書舟修
名日淋
甲家の
版の
子
鞠
く
火

露布庵

強弱交ひし
景色桂物
秋の夕暮
夕夕利ま
面なく坊立
金

小石川
上、餅指町

先師一後後龜成門

峽田菊堂

小原女の肩のくさるる 地中
白浪の煙りの走る 後流の
多ひかたの玉の宿半の晴雨より
身のうちよみとまらぬて秋の
秋の夕暮もまらぬし 糸車
塔のこのゆきぬみゆきぬ
ちのくさるるて目かたの残幟
今汐の海と比は浦とちかく
子と持つと當るくらぬぬ後 腰
相法ハ、あぢかきくくく 人難也

青陽庵

一神ありて
秋風の夕尾
庵ホソク
うけ
駕車物杯
あひて奥の
侍

目か指

先師貞吉屋岡大門

曾古明

ひよの町一町の中を

如きよの道程のほろり 馬道
吹矢町おし ちゆる糸物
今ハ、後と後とち 尾
夜泊の木の言さよ 冬 霧
お後の糸の通るよ 冬 霧
大将は亡く糸糸は連袂して
香美は弱る糸糸は振かくし
隣りの糸糸もちかくする
能男まらぬ 遠つて悟ちぬ
早子もまらぬ 遠つて悟ちぬ

黄雀軒

牛込 先師を席後百萬門
若文八幡茶南子

遠山雲柱

一我強き言
陣中の白
蛇の白
物づく
白く

魔不著て杉多蛇と吹落し
大供養皆辨れとこれ程も
復魂を囀りていふ辨りて
殊りていふ名あり 舞の癖
幽きよありていふ所 思ひの志
寓不月近くをとぬく 蛇
當り十月と陣中ていふ
梅喉へ割て 麦 胸りすく
二世りけるま おもかくすも大根
侍院の凡も君とと 呼く

星霜庵

龍河平河町 百萬門
一所目鈴店

熊谷白頭

わくまを
むとあき
ゆるし
遠き地名
香深岩仙
のん持よ
多く
まうら

竹町の一番赤い子
けねぬとまふ 八所女居の
井戸より持りて 梅元の巨唐賣
あまのくまの 琵琶の持賣
おまの買 坊のりり
津波の衣と海耳の灯 亮
袖形て一寸 梅を市以蓋
赤岩の袴 名あり梅松の灯
子の葉版らたありて 初経
手拭て居りて 梅 葉 夜

三呼庵

やうやくこ
 とつて構
 うは
 買色と
 傾城女節
 免 吉原杯
 りと
 心

在轉回唐

河野丈天

島原や 寺柄のうつよ柳 只
 廻板あつぬ 秋のち
 家思ひ夢う 冷ふ虫の内入
 道の花雪木の 賦元と是すも
 萍のまうと思ふ 魚の流
 星はれとも牡丹の西日うまう
 澄みあて 芥りる花かつこりか
 尾系らる中よ 白子の橋
 大年の夜 埋木福寿州
 帯糸と菊 踏老ふからぬ斗りこ

大中庵

弱きこ
 長りあて
 りあり
 孝行 構物
 秋敷の白
 う

独立
 深柳下橋所 先立志門
 在室町
 小室系丹下飯長屋

關立志

孝りも神の初穂の二金先
 女て終て 後る 重代
 源竹の枝も 秋乃菊を
 高梅の地代れ 肩子帆とる
 後る木の竹も 運のそく
 破戸ろとまて 納るる 武家れ春
 焚たら 多あり 皮お比 初能
 表の日の一日も ぼじ 涅槃像
 敷割の片く いくさ 圖兩
 樓か 見て 寄依 傳と 傳

^{独立}賞酒庵

宇多川町

勝沼大道

一物新し
思ひ
新装
意
梅物も
五

子と持ぬ懐きり、兎の物終
示座とせるとこゝの、六十
鼻紙の梅とせざる、半のま
膝る所やね、梅とせ、梅とせ
か子とく、さりき、海をの、使
雷とせ、梅とせ、梅とせ、梅とせ
黒とせ、梅とせ、梅とせ、梅とせ
梅とせ、梅とせ、梅とせ、梅とせ
妻の怒らぬ、梅とせ、梅とせ
刺つて、梅とせ、梅とせ、梅とせ

^{独立}松汀菴

赤羽的場菴浦

今村雷魚

りー語ま
古人の名
根 鶴
態 鶴
新装の
ら 鶴

僧正の、梅とせ、梅とせ、梅とせ
東へか、梅とせ、梅とせ、梅とせ
通ね、梅とせ、梅とせ、梅とせ
雨とせ、梅とせ、梅とせ、梅とせ
川燈部、梅とせ、梅とせ、梅とせ
河ま、梅とせ、梅とせ、梅とせ
波し、梅とせ、梅とせ、梅とせ
留の、梅とせ、梅とせ、梅とせ
支の、梅とせ、梅とせ、梅とせ
い、梅とせ、梅とせ、梅とせ

非皆舊

揚上
杖賀野坊

形川
かぶのよの表

萱王 抱節

張三つあし

千載集は矢尻 研中

湖十糸の

蕨のふんふんをんくま喰れり

くねと怒

今戸の京もりぬ 梅の尾

くすくす

蕨のの後家へう 育れ 白粉

あふ葉

詩と吐く 腹へ 唐茶と 入替付

り糸

秋寒く 袴馬の 羽の 尻しき

り糸

卯の花と 中は 護も やうくく

り糸

佛へ 馬と むける すし 押

り糸

毎年の 年の 高の つかい つかい

独立

素茶湯庵

二谷

田中地蔵茶

先師曲房門

笠家左衛門

一物わらう

この糸の 仕方 嘯し 草 帚

あつとー ぼ

深州へ 伝 三 所 近 の 壱 所 江

あつとー ぼ

流 際 ず 糸 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ

古糸 糸 へ 糸

昔 傳 へ の 奇 道 へ 糸 と 麻 道 へ 糸

ら糸

吟 積 も 門 松 有 且 且 志 賀 の 里

連歌附名

迂 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

の通ふて

山 吹 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ

あつとー

高 糸 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ

あつとー

招 へ の 糸 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ

あつとー

人 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ 糸 へ

獨立 弥重庵

和らそ抄お
横おとく情ふ
入てりすふ下
千佐の抄巻
福そり
とつて自らの
各うとふて
とつてあり

河津川所 生麻乾竹門
柳稻右様所

根本雪斎

冬進く遊と名家を可くす瓜
黄しくして祇王ちて 死ぬ
夜之終の存てもるむ貸し横
藤よりくく日換板 へ 杖
智さし一の地と隠を思の者
相一葉落して秋ををれそを造し
白菊の汚れとふれ女の手
一首書 程ハあるも 忘れさらて
九日と云 春の又咲せさひ州
将う物 放りぬ人の福と

獨立 葛庵

和らそ抄お
横おとく情ふ
入てりすふ下
千佐の抄巻
福そり
とつて自らの
各うとふて
とつてあり

柳原 和泉右様所
先作丑留後存義門

藤 李門

春ふりて扇ますり
向紅の味うちのゆみ浮
大わちるる 夢 喰ひ去るあつて
梅場の後し 之 陰 の市
白魚の又青のわら しの思及ん
氣ささるん の 鶴りやうた
木の角よとさす 椿一梅
門がのうくく 代 絶むり
夏のおさふ 新る夕やけ
悟先の面うよ 並ふ志 ぬさ

誹諧之名出滑稽昔傳所共
 知也我何容齒牙此集也
 欲使彼競優劣者探宗匠
 蘊奧必逢其原也能秘諸
 帳中則孰能敵之得俊句
 麗藻猶取囊中物雪子之
 舉大矣至矣余忘其固陋
 記卷末之爾

忍川舍

明和戊子秋 徐冰



誹諧鱗後篇

惣宗近句、点式印譜委記
芙蓉散人雪成著 近刻

四季發句帳

江都惣宗近四季句悉少集
芙蓉散人雪成著 近刻

誹風柳樽

新堀端考士万句合拔書
初二三篇迄出来 補助 櫻木庵

源氏活花手引草

千葉龍卜先生活方圖 四季
花寄松茂齋五凌著 西面摺出来

和漢軍談記畧考

諸軍談年曆順付委少記
花名數書名寄 西面摺出来

明和五子種

東廬山下竹町星運堂梓

花屋久次郎

